

## ウキヨ／floating world

—カドハタとイシグロの作品の表題をめぐって—

杉 浦 悦 子

### “floating world”

ここに2冊の本がある。1冊はカズオ・イシグロの *An Artist of the Floating World*、もう一冊はシンシア・カドハタの *Floating World* である。<sup>1</sup> あえて原題を英語のままで書いたのは、“floating world” という言葉の日本語訳を躊躇するからである。

カズオ・イシグロは1954年、長崎の生まれである。彼はごく幼いときにイギリスに渡り、英語で作品を発表している。一方、シンシア・カドハタは1956年、アメリカの生まれである。イシグロがイギリスで *An Artist of the Floating World* を発表して、人々の注目を集めたのは1986年、すでに1982年に *A Pale View of Hills* で王立文学協会賞を受賞していた彼にとっては、2冊目の本であった。一方、シンシア・カドハタが *Floating World* でアメリカの文壇にデビューし、絶賛されたのは1989年のことだった。イシグロの物語の舞台は第2次世界大戦後の日本であり、それに対してカドハタは舞台を1950年代のアメリカに置いている。この二人の同年代の日系作家が、一人はイギリスで、一人はアメリカで、相前後して“floating world” という言葉をタイトルに選んだということになる。これには何か意味があるだろうか？二人がこの言葉で描こうとした世界はどのような世界だろうか？二人はこの言葉をどのような意味で使っているだろうか？そして、二人の本の表題は、どう翻訳することができるだろうか？

“floating world” を日本語に翻訳するとすれば、floatが「浮く」、worldが「世界」であるから、「浮世」と訳すことになると思われる。(実際、イシグロのこの作品は「浮世の画家」と邦訳されているが<sup>2</sup>、これに対してカドハタの作品の邦訳は、原書のタイトルを避けて、『七つの月』としている。)<sup>3</sup>「思われる」というのは、日本語の「浮世」という言葉が、単に「浮いている世界」という

意味内容だけしかないとは思えないからである。と言うよりはむしろ、「浮く」という言葉で、わたしたちはたんに物理的な現象のみを物語っているのではないと思われるからである。わたしたちが日常「浮世」という言葉を口にする場合、わたしたちの脳裏に浮かぶのは、「浮く」という言葉が含むあらゆる意味、——浮き草や筏、船、雲、そして水や雲を浮かべる空など流動的なものすべて、不安定なもの、そして自由なものすべて——と、「世」という言葉が持つあらゆる人間界の営み、そして人間の生そのものである。だから、“floating world”を日本語に翻訳するとき、「浮世」と訳すことによって、日本語を第一言語としていない二人の作家の作品の原題に、あまりにも多くの意味を付与することにならないかという疑念を抱くからである。あるいは、英語で書く日系の二人の作家たちは、まさしくその“floating world”という、英語では表現し得ない意味をこの二語にこめているのだろうか。

本稿は厳密な意味での研究論文ではなく、“floating world”という言葉の意味を考察した上で、日系でありながら英語で作品を書いている二人の作品の中に、その概念がどのように表現されているかを確かめ、二人の作品の表題をどのように翻訳することができるか考察しようという試みである。

### ウキヨの定義

『広辞苑』は「浮世」について、「仏教的な生活感情から出た「憂き世」と漢語「浮世（ふせい）との混淆した語」としたうえで、以下のような4つの定義を挙げている。<sup>4</sup>

- ① 無常の世 生きることの苦しい世
- ② この世の中。世間。人生。
- ③ 享樂の世界。
- ④ 近世、他の語に冠して「現代的・当世風・好色」の意を表す

『岩波古語辞典』もまた、「うきよ」に、「憂き世」と「浮世」二つの漢字を当てて説明している。<sup>5</sup>

うきよ 「憂き世・浮世」《平安時代には「憂き世」で、生きることの苦しい

此の世、つらい男女の仲、また、定めない現世。のちには単に此の世の中、人間社会をいう。「憂き」が同音の「浮き」と意識されるようになって、室町時代末頃から、うきうきと浮かれ遊ぶ此の世の意にも使われるようになった。

- ① 無常の現世。はかない此の世。つらい世の中。
- ② この世。人の世。現実の人間社会。また、人生。
- ③ 浮かれ遊ぶべき世。享樂の世の中。
- ④ 当世。今様。

また、『大漢語林』は「うきよ」ではなく「フセイ」とルビをつけたうえで、二つの定義を挙げている。

- ① 定めない世の中。はかないこの世。人生。
- ② うきよ。他の語に冠して、現代的・当世風・好色などの意を表す。〔浮世絵〕

さらに、『大漢和辞典』は「①定めない世の中 ②(イ) 今の世の中、今様、當世風 (ロ) 色好み、好色」としている。<sup>6</sup>

とすると、「浮世」という言葉には、「浮く」という物理的な現象だけでなく、最初から「つらい」「悲しい」という意味が込められていたことになる。なぜ、私たちはこの世を「つらい」「悲しい」と捉えるのか？ この世が無常だからである。常に移り変わる世界では、生あるものは必ず死ななければならない。生あるものばかりではない。形あるものはすべて、明日は川の水に流されるように、失われてしまう。そういう有為転変の世界を私たちは浮いている世界「うきよ」と捉え、音が同じ「憂き世」と結び付けて捉えるのである。

そして、「浮き」という言葉に「浮かれ騒ぐ」という意味が加わり、遊里や芝居などの娯楽施設を「浮世」と呼ぶようになってからも、そういう憂き世の有為転変をもっとも極端な形で示しているものとして遊里がとらえられたということになるかもしれない。ここでは人々はひと時の歡樂に耽るが、そのひと時が過ぎればわれに返り、再び憂いに満ちた現実世界に戻ってゆかなくてはならない。そして、この世界で若く美しい人は、やがて老い、醜くなるかもしれない。病に倒れるかもしれない。また、華やかな芝居の世界も同様である。今は人気を集める俳優も、その若さと美貌はほんのつかのまのものでしかなく、

明日は舞台を去らなくてはならないかもしれない。また、浮世という言葉に「当世風」という意味がこめられるのも、もっともなことである。流行の最先端をゆく人々の生き方、ファッション、物は、「当世風」であればこそ寿命は短く、明日は過去のものとなり、顧みられることもなくなってしまうからである。

それでは、英語の辞書ではどうであろうか。OED, Webster, Random House いずれにも「ウキヨ」の項目はないが、「ウキヨエ」だけは記されている。

OEDは「浮く」と「世」の英訳を載せたうえで、その技法のうえから定義をしている。

浮く：漂う、すばやく立ち去る

世：世界

日本の芸術の I 形式。木版画と絵とがあり、日常的な生活ぶりを単純な手法で描いたもの。この形式で描かれた絵画。<sup>7</sup>

Websterは、「浮世」を「世界、人生」という定義を記した上で、「17世紀から19世紀までの日本の芸術の形式で、当世風の生活や娯楽を描く絵画や色刷り版画を特徴とする」と説明している。<sup>8</sup>

Random Houseは、“Japanese Art” の項目で歴史的な説明をしてはいるが、「浮世」の意味にはまったく触れていない。<sup>9</sup>

狩野派の衰退に助けられて、浮世絵という新しく人気のある派の台頭した。木版画の一派で、江戸時代の本や絵、芝居のポスター、商業的印刷物などを作った。主題は当時の人気者、遊女や俳優、演劇のさわりの場面、春画などである。

浮世絵に関しては、『広辞苑』、『大漢語林』はそれぞれ以下のように説明している。

江戸時代に発達した民衆的な風俗画の一様式。肉筆画も行われたが、特に版画において独自の美をひらいた。桃山時代から江戸時代初期に流行した肉筆の風俗画、美人画を母胎とし、一七世紀後半の菱川師宣によって版



本（はんぼん）挿絵として様式の基礎がつくられ、さらに1765年に鈴木春信により多色刷版画（錦絵）が創始されて、黄金期を迎えた。その主題は遊里や芝居の情景、美女、役者、力士、などの似顔絵を中心とし、歴史画や風景、花鳥に及ぶ。作家としては、他に鳥居清長、北川歌麿、東洲斎写楽、葛飾北斎、歌川広重などが名が高く、一九世紀後半からヨーロッパの美術にも影響を及ぼした。（『広辞苑』）

当世の風俗を主題にした絵。多くは芸技・遊女・役者・武者の似顔や色里・演劇の模様などを描いた。肉筆と版画がある。もと土佐絵の分派で、岩佐又兵衛が創始したともいい、菱川師宣・鈴木春信・鳥居清長・喜多川歌麿・葛飾北斎・安藤広重が有名。（『大漢語林』）

3つの英語の辞典は、一応浮世絵の定義を記しているが、それが「浮世」とどう関係があるのかは説明できていない。3冊のうちではOEDのみが「浮世」の定義を試みており、「浮き」という言葉に「すばやく立ち去る（go by fleetingly）」と説明してはいるものの、「浮き」という言葉に「すばやく立ち去る」という意味がなぜ加わるのか、また、その「浮いている世界」「すばやく立ち去る世界」と浮世絵の定義のあいだのかかわりには触れていないのである。また、「浮く」という言葉の物理的な意味は翻訳されているが、「憂き」という悲しみの感覚、流動に向けられた憂いを帯びたまなざしは、英訳から抜け落ちているのである。

それならば、“floating world”という言葉を表題に使った二人の作家は、果たして、その中に、この抜け落ちた意味を込めているだろうか？

### 「ウキヨ」という世界観

すでに述べたように、「ウキヨ」と言う言葉が持つ無常観は、浮世絵の中の題材にみられる。

美しい女性、力士、役者たち、みな、つかの間のこの世の喜びを象徴している。また遊里が与えてくれる楽しみも、一夜の夢のようなもの、まさしく「浮世」である。そして、日本人はそういう無常のものを美しいと思い、いとおしむ感情を持っていた。

たとえば、その代表的な例が桜である。桜は広辞苑によれば、「古来『花王』と称せられ、わが国花とし、古くは『花』といえは桜を称した」とあるほど、愛されてきた花である。日本では、桜の花期は非常に短い。その短命なところが、桜が愛される大きな理由と思われる。紅葉も桜ほどではないが、その盛りの時期はやはり短い。花火はさらに短い。こういったものをいとおしむ感情は、美しくもはかないものへの、悲しみが入りまじった感情である。あるいは、はかなくあればこそ、いっそう美しいと感じとる感情であり、これは、堅固なもの、丈夫で長持ちするものへの信頼感とは裏腹である。日常的には、人は丈夫で長持ちするものを求め、安定、永続性、恒久性を求めるはずなのだが、しかし、この世を流動する「浮世」と捉えた場合、ものが変化するのは否定しようのない事実である。はかなくも美しいものを愛する美意識は、すべては無常であるという「憂き」事実を受け入れ、そのうえで、そこに悲しみ、哀れみの気持ちのまじった愛を覚える、ということになるといえる。桜を愛する美意識とは、変化、流動を悲しみつつもそこに美を見出すという、一見矛盾する、アイロニカルな感情である。

この世を無常と捉え、その流動に身を任せることを表す言葉も、日本語は多く持っている。放浪、流浪、さすらい、さまよい、彷徨、こういった言葉は、無常の世の中にあって、それを受け入れ、自らをその流れに任せて移動する生き方を意味する。ことに、最初の二つの言葉には、やはり、水のイメージがこめられている。こういった言葉は、決して一般的な意味での幸福を表現してはいないのだが、しかし、私たちの流浪への憧れ、あるいは少なくとも、流浪する者への憧れや敬意が込められている。（畏れがこめられていることも否定できない。）たとえば、禅宗の僧侶が雲水と呼ばれるのも、その精神の表れであろう。流れ者、無宿者、フウテン、宿無し、となると少し否定的な意味がこめられるが、それにしても、映画やテレビドラマ、歌謡曲のテーマとしてはいまだ衰えを見せておらず、やはり、人気のあるヒーローである。

また、古典文学の分野でも、「祇園精舎の鐘のこえ、諸行無常のひびきあり」で始まる『平家物語』は人生の栄枯盛衰がいかにほかないものであるかを語る代表的な作品である。<sup>10</sup>ことに、平家の一族が壇の浦の水に身を投じる場面は、華やかな一族を押し流し、呑み込んでしまう水のイメージを美しく描いている。「ゆく川の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず」<sup>11</sup>で始まる『方丈記』も、水のイメージで世の移り変わりを物語っている。また西行、芭蕉の文

学は、都から遠く離れた彼方の土地への旅をテーマにしたもので、その中心にあるのは、無常観であるといえよう。芭蕉が『奥の細道』に掲げた「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらえて老をむかふるものは、日々旅にして旅を栖とす」はあまりにも有名である<sup>12</sup>。唐木順三はその『奥の細道』について「過ぎゆくものをまさに過ぎゆくままに実感するのが「旅人」であり、「旅」は過ぎゆくもののあらわな姿である」と述べている。<sup>13</sup>実際に芭蕉も西行も定住する自分の家というものを持たなかった。彼らの文学を読むとき読者の心に呼び覚まされるのは、無常をわが身に引き受けて、家も家庭も人の世のしがらみも捨てて、ひとりさすらう旅人への、共感と憧憬である。

しかし、そのようなさすらいに対して共感や憧憬を覚えたからといって、西行や芭蕉の読者がすべて、家を捨てて放浪に身を任す人生を選ぶというわけではない。大多数の人々は、定住し、共同体を形成し、その一員となり、そこで何らかの役割を引き受ける。不都合なことがあってもある程度は我慢をし、一生を終える。それもまた「ウキヨ」である。

共同体の中に定住しても、そこにもやはりさまざまな有為転変があり、病や老い、死から放免されるわけではない。しかし、そこでなら、少なくとも、家族同士、仲間同士が支えあうことができる。せめて、そういう家族や仲間を当てにすることができる。共同体が与えてくれる保護と安定がある。大多数の人々は、何らかの共同体の中に所属し、そこに定住することで、せめてもの安定を得ることに満足し、日々の細事に心を砕きながら、暮らして行くのである。そして、そういう暮らしの中で、自分たちのとはさぞ違うであろう、さすらう旅人の生き方に思いを馳せる。もしも、西行や芭蕉の文学に、またあるいは無宿者や流れ者、埃だらけの衣をまとった僧侶の姿に覚える憧れと敬意に、畏怖の念が混じっているとしたら、それは共同体の中の定住者が忘れたいと願っている無常を、彼らが体現しているからである。「浮世」が含む「憂き」意味を思い起こさせるからである。しかし同時に、無常を受け入れて、無常そのままに流されてゆく彼らの姿には、日常のしがらみにとらわれた定住者たちにはない魅力がある。それは「浮く」という言葉の持つ軽やかさ、舟にたとえるならば軍艦のようにどっしりした様子ではなく、小船や筏のような、心もとなくはあるが、拘泥することなく流れに身を任せるその自由闊達な趣である。その魅力を定義することはできないのだが、定住者たちは、名状しがたいアンビヴァ



レントな感情を抱くのである。開花したと思うまもなく散ってゆく桜を愛する感情と同心円をなす感情である。

### カドハタとイシグロの“floating world”

カドハタとイシグロは、それぞれの作品の中で「浮世」をどのように書いているだろうか。

その頃私たちはお母さんの言う「浮世」、漂う世界を旅していた。漂う世界はガソリン・スタンドの従業員、レストラン、暮らしを支える仕事、そして、モーテルのある街で、それは草原や山並みの真ん中に浮かんでいるのだった。昔の日本では、浮世とは売春宿、茶屋、風呂屋が並ぶ地域のことだったが、移り変わることに、楽しみ、そして移ろうものが残してゆく寂しさも意味していた。(カドハタ p.3)

カドハタは、浮世の定義を、いわゆる市井の日常世界、現世という意味から、遊里へと変換し、さらに無常の世という意味へと展開しており、さらには、「浮世」の概念が持つ「憂き」の感覚、悲しみへと広げているのである。

同時にこの物語は50年代のアメリカ国内を、仕事を求めて移動する日系の家族の物語で、移動する彼らの生き方そのものも物語っているし、また、彼らが日本からアメリカに移民して来たということをあわせて考えれば、彼らが根ざす故国というものを持たずに、根無し草のような暮らしをしていることも意味していると考えられる。

一方イシグロは*An Artist of the Floating World*で、「浮世」のことを歓楽街として説明している。

私たちはその数年モリさんの価値観と生き様をほとんどそっくり真似して生きていた。そのため市内の「ウキヨ」、夜の歓楽、娯楽、酒の世界の探検に多くの時間をかけることとなった。その世界が私たちの絵の背景になったのだ。当時の市の中心地の様を思い出すと、いつもある種の郷愁にとらわれる。通りは今ほど車の音がしなかったし、夜気はまだ季節の花の香りがしていた。今は工場のせいで、それがなくなってしまった。私たち



の行きつけの店はコジマ通りの堀端の小さな茶屋で、「水提灯」という名だった。その名の通り、建物の外に吊るした提灯の明かりが堀の水に映っているのが、近づくにつれて見えるのだった。(イシグロ,144)

しかし、物語が進むにつれて、イシグロは「浮世」の意味を少しずらして使っている。次に挙げるのは、ジサブロウという浮世絵師が歓楽街で酒に溺れている様子を仲間の絵師が語る部分である。

ジサブロウは不幸な男だった。ジサブロウの人生は悲しい。才能をだめにしてしまった。彼が愛した者はとっくの昔に死んでしまった。あるいは彼を見捨てて行ってしまった。若いときから、彼はもう孤独で悲しい人だった。(中略)だが、当時わたしたちは歓楽街の女たちと遊んだものだ。ジサブロウは幸せな気分になった。ああいった女たちは、ジサブロウが言って欲しいと思っていることを言うてくれたからな。それにどっちにしても、一夜かぎりのことだが、ジサブロウは女たちの言うことを信じることができた。もちろん、朝になれば、そんなこと信じているような愚か者じゃない。(中略)ジサブロウはいつも言っていた。最高のものが一夜に凝縮されていて、それが朝になると消えてしまう。いわゆるウキヨというやつ、ジサブロウはその値打ちを知っていた。

(中略)ジサブロウは以前より年を取り、いっそう不幸になった。だが、いろんな意味で彼はあまり変わっていない。今夜あいつは楽しんでいる。昔もこういった遊び場ではそうだった。(中略)絵描きが捉えたいと思う一番洗練された、一番もろい美は、ここに流れ込んでくる。だが、そこにある絵は駄目なんだよ。こういった移ろいやすい、まぼろしのようなものを、わずかでも示していないから。(イシグロ,149-50)

ここでは、遊里は一夜限りの楽しみであり、朝になれば消えてしまうと承知しながら、そのはかなさを知ったうえで、それを楽しむという浮世のあり方が語られているばかりでなく、さらには、そういった幻のような遊里を、浮世絵師が捉えようとするはかない美、無常の美の場所としているのである。イシグロは“floating world”という言葉に、浮世が持つ無常の世へのまなざしを確かにこめているといえよう。その意味では、彼の表題“The Artist of the

Floating World”を、「浮世の画家」ではなく「浮世絵師」と訳すこともあるいは可能かもしれない。

### カドハタが描く放浪

『フローティング・ワールド』は、12歳の少女オリヴィアが語る日系の家族の物語である。両親と母方の祖母、3人の兄弟は、父親が運転する鯨の形をした灰色の古ぼけたセダンで、アメリカの州から州へと移動する。彼らが昼間の大半を過ごすのは幹線道路であり、夜、一家6人が肩を寄せ合って眠るのは、そういった道路沿いにあるモータルの一室である。

50年代といえば、アメリカの多くの市民が、世界でもっとも豊かで強い国であることを誇り、その繁栄を享受した時代である。その時代にこの家族は、仕事を求めて移動していたのである。

一家の移動は祖母、ヒサエ・フジタノが日本からアメリカに移動したときから始まっていたわけなのだが、オリヴィアは一家の移動の理由を三つ挙げて説明している。その一つは運が悪くて、勤め先の経営がうまくゆかなくなったり、仕事先を目指して移動している間にその仕事が無くなったりしてしまうということである。第2は社会的な理由である。「50年代、60年代になっても、まだ日系人が良い仕事に就くのは難しかったということもある。お父さんは自分にふさわしい仕事が多々見つからなかった。」(カドハタ・4) 第3は家族内の理由である。「お父さんもお母さんも結婚生活に満足していなくて、引越しがなんとなく不満の捌け口になっていた。住み慣れた家を出るのはいつだってつらかったけれど、いったん車に乗って走り始めると、わたしの心のなかのどこかに、こんな生活を楽しんでいるわたしがいた。」(カドハタ・4)

とは言うものの、一家は必ずしも旅の暮らしを好んでいるわけではない。あるとき一家は通りかかった住宅展示場に、買えるはずもないモデルハウスを見に行ったりするのである。販売業者に案内してもらった後、オリヴィアは「わたしたちは少し怯え、少し希望を持ち、少し恥ずかしくなった。希望がわいてきたのは、きれいな家を何軒も見たら、そうだったのだ」(カドハタ、180)と語っている。絵に描いたようなモデルハウスでの暮らしを、一家は心のどこかで願っていたのかもしれない。

オリヴィアはまた、定住への憧れのようなものをふと覚えることを記してい

る。一家が立ち寄ったハイウェイ沿いのガソリン・スタンドで、土地の人々が巻き込まれる交通事故を目撃したオリヴィアは、その場を離れた後で、怪我して病院に運ばれた女性の身を案じながら述懐する。

私は、あの事故の現場に居合わせたほとんど全部の人が、あの女性がどうなったか知るだろうということを考えた。そして、あの人たちは女性の行く末がわかるから、あの人たちの心配の仕方は私たちのとは違うのだと思った。ある人が怪我をして、もしかしたら死ぬかもしれないということ、私は知った。けれどもそれは私にとって、過去のことになりつつある。それは起こってしまったことに過ぎない。ちょうど、私たちが通りすがりに見た火事が、道すがら通り過ぎてゆく火事に過ぎないのと同じことだ。燃えているのは誰かの家とか農場であるかもしれないのに。それはおばあさんのウキヨの一部に過ぎない。今夜起こった事故の現場近くには数人の男の子たちがいた。あの子達はあそこを通るたびに、事故の夜のことを思い出すかもしれない。ほんの少しぐらいは。あの子たちにとってそれはつらいことかもしれない。けれども、良いことでもある。あの子達はいつも、自分たちには決して知ることのできないものに会おうたびに、身構えなくても良い。そして、私の弟たちはどうしてあの子たちのようになれないのだろうか？それも私の知りたくてならないことだった。(カドハタ・41)

ここから読み取ることができるのは、定住を捨てた暮らしの寂しさである。彼らは、共同体の人々との付き合い、共有することのできる記憶や思い出、土地への愛着なども捨ててしまったのだ。

しかし、家族が漂っているという感覚にさらされているのは、実際に移動しているのと同時に、母親のマリコが結婚生活に満足していないからでもある。マリコは自ら望んで結婚したのではない夫、チャーリー・オーサカを心から愛することができず、かといって善良な夫を憎むこともできず、さりとて幸福な妻を演じて夫を満足させることもできず、4人の子供を抱え、逃げ出すこともできず、心ならずも夫を傷つけてしまう。だから、この浮遊感、不安定な家族のあり方を象徴してもいる。オリヴィアは幼いながら、両親の抜き差ししない関係を鋭敏に感じ取っている。だから、カドハタが書いているのは、不安定な世界という意味のウキヨであると同時に、「憂き世」、悲しみに満ちた人の



世のありかたでもある。カドハタは「フローティング」という英語を使いながら、「漂う」という意味から、放浪へと、そして、不安定な人の暮らし、悲しみに満ちた人の世という意味へと広がりを持つ日本語の「ウキヨ」の意味へと到達しているといえよう。

カドハタの作品は、息詰まるような貧困や家族の葛藤を描きながら、からっとしている。また、両親の結婚の破綻は、それまで模範的移民といわれた日系移民の典型的なイメージを破るものでもあった。そういう意味で、ポストモダンという評価がなされており、確かに、カドハタがポストモダンの時代を経験した作家であることは否めないのだが、そのポストモダンの要素の奥の彼女の肌理のなかに、あるいは「ウキヨ」の感覚、あの旅人たちが放つ寂しげで、しかもどこか軽やかな明るさが織り込まれているのではないだろうか。

### イシグロの有為転変

イシグロの物語の場面は1948年から49年の夏にかけての日本のある都会である。長崎と思われるが、特定することはできない。物語はオノという今は引退した老画家のモノローグで進められる。オノは若いころは浮世絵師の下に弟子入りし、遊里に入り浸って耽美的な絵を描いていたのだが、戦時中は戦争画家として頭角を表わし、権力をほしいままにする。「内務省文化委員」「非愛国活動対策委員会の諮問委員」といった地位も与えられ、「ミギヒダリ」という名の歓楽街の創設にもかかわり、その中に自分専用の一 corner を手に入れるほどの権力者となるのである。しかし、彼は戦争の被害者でもある。彼は戦争で妻と長男をなくし、豪壮な家も爆風を受け大規模に破損している。戦後数年たった今、彼は次女のセツ子と、まだ修復できていない家でひっそりと暮らしている。そして、かつて殷賑を極めた歓楽街ミギヒダリも、空襲を受けて廃墟となったまま、放置されている。

もし暗闇が降りかかる頃カワカミさんの店を出れば、しばらく立ち止まって目前に広がる廃墟に目をやらずにはいられないような気がするかもしれない。折れた木材や煉瓦のかげらが薄暮のなかにまだ見えるかもしれない。そしておそらくそこかしこに、地面から雑草のように頭を出している土管も見えらるだろう。そして、さらにいくつもの残骸のそばを通りすぎ

てゆくと、無数の小さな水溜りが、提灯の光を受けて、一瞬きらめくのがあった。

そして、私の家に通じる坂道の下まで来たら、「迷い橋」に立って振り返り、かつての遊里の跡に目をやれば、太陽がまだすっかり沈んでいなければ、今自分が歩いてきた道に沿って並んでいる電線のない電柱の列が、闇に沈んでゆくのが見えるだろう。(イシグロ、27)

オノはこのように荒廃したミギヒダリを郷愁をこめて眺めている。

だが、彼が戦争から受けた何よりの痛手は、戦後の価値観の変化である。彼はかつて自分が正しいと信じたことは、誰からも、娘婿からも、一番身近にいると思っていたかつての弟子からさえも、間違いだったと思われる。しかも、オノ自身はその新しい価値観をほとんど理解することもできずに、時代から取り残されている。オノはまた、「非愛国活動対策委員会の諮問委員」として迂闊に犯した自分の過ちも本当の意味では理解していないように思われる。また、オノはその自分過ちと自覚していない罪のために、弟子からも裏切られ、孤独である。

先ほだわたくしは“The Artist of the Floating World”という表題は遊里のはかない美に象徴される無常を描いたという意味で「浮世絵師」と訳すことができるかもしれないと記したが、戦前から戦後への激しい変動に翻弄されながら浮遊する画家という意味では、まさしく浮世を漂う画家、「浮世の画家」という訳語がさらにふさわしいといえよう。

次女の見合いを何とか成功させようとしているうちに、オノは多くの人々から自分の行いが過ちだとされていることに、次第に気づかされる。そして、娘の見合いを成功させたいという願いもあって、オノは謝罪するのである。紙面の制限があるので、ここではオノの心理に深く立ち入る余裕はないのだが、オノが本当に自分の過ちを理解していたかどうかは不明である。しかし、周囲の人が過ちだと考えているということを感じ取ったオノは、次女の見合いの席で居合わせた人々に謝罪するのである。

我々の国に起こった恐ろしい出来事の責任を負うべきは、私のような者だという人がいます。私は、多くの間違いを犯したことを忌憚なく認めますよ。私がやったことがこの国に多大な害を与えたということを受け入れ

ます。わたしのやったことがわが国の人々に語りつくせないほどの苦しみを与えることに寄与したという事実を。斉藤先生、潔く認めます。(イシグロ, 123)

オノが犯した過ちは、実は才能のある若い画家の一生を狂わせてしまうばかりではなく、多くの国民に影響を与える大きな過ちであり、決して過小評価すべきものではないが、イシグロが描くのは、好むと好まざるとにかかわらず、歴史の流れの中に身を任せて漂ってゆく人々である。彼らは、自分たちが正しいと信じていること、正しいと信じるように教えられたことを、検討する力や特別な視点を持たない。彼らは、ごく普通の人々である。迫り来る老いと孤独の中で、かつて自分が犯した過ちとその結果に、驚き悩むオノの姿、自分の過ちが娘の生涯に影響を与えるかもしれないことに驚き、娘の行く先をひたすら思い謝罪するオノの姿は、よく理解できないままに歴史の畏にかかった人物の姿であり、それは浮世に生きる、大半の不完全で無力な人物の姿である。

オノのように、懸命であるにもかかわらず、能力の限界のために時代の流れを見誤り、大きな過ちを犯す人物像を、イシグロは次作 *Remain of the Day* で、形を変えて描いている。<sup>14</sup>イシグロが描くのは、大きな歴史のうねりの中で、その全貌を見ることを許されず、ただ、懸命に日々の自分の仕事に打ち込みながら、その流れに翻弄される不完全な、過ちに満ちた人間の生き様である。そういう意味で、彼らは浮世の人である。

イシグロは『文学界』のインタビューで、最新作『わたしを離さないで』について語りながら、『日の名残り』についても言及している。

わたしが昔から興味をそそられるのは、人間が自分たちに与えられた運命をどれほど受け入れてしまうかということです。(中略)人はどれほど自分のことについて消極的か、そういうことに私は興味をそそられます。自分の仕事、地位を人は受け入れているのです。そこから脱出しようとしません。実際のところ、自分たちの小さな仕事をうまくやり遂げたり、小さな役割を非常にうまく果たしたりすることで、尊厳を得ようとします。時にはこれはとても悲しく、悲劇的になることがあります。時にはそれがテロリズムや勇気の源になることがあります。私にとっては、その世界観のほうがはるかに興味をそそります。(中略)『日の名残り』は、執事



であることを超える視点を持ちようのない執事についての話です。我々はこれと変わらない生き方をしていると思います。我々は大きな視点を持って、常に反乱し、現状から脱出する勇気を持った状態で生きていません。私の世界観は、人はたとえ苦痛であったり、悲惨であったり、あるいは自由でなくても、小さな狭い運命の中に生まれてきて、それを受け入れるというものです。みんな奮闘し、頑張り、夢や希望をこの狭くて小さいところに、絞り込もうとするのです。<sup>15</sup>

この言葉は*An Artist of the Floating World* について語ったものではないが、イシグロの関心のありようをよく物語っている。

イシグロは“floating world”という英語に、遊里から、そこに見出されるつかのまの美しさ、さらには無常の人の世という、浮世のあらゆる意味をこめて、無常の浮世を流されてゆく人々の生き様を、共感を込めて描いている。彼の“An Artist of the Floating World”という表題は、「浮世の画家」と訳すのがふさわしいと思われる。

カドハタもイシグロも、ともにその作品によって、“floating world”という英語の単語に、日本語の「浮世」が持つ無常観とそれを受け入れる感性を持ち込むことに成功したと言えるのではないだろうか。

# 注

- 1 テキストは、以下の2冊を使用した。

Kazuo Ishiguro, *An Artist of the Floating World* (London/Boston, faber and faber, 1986)

Cynthia Kadohata, *The Floating World*, (New York, Viking, 1989)

この2冊からの引用の後のカッコ内の数字は、ページ数を示す。

- 2 カズオ・イシグロ著、飛田茂雄訳『浮世の画家』早川文庫 2006年
- 3 シンシア・カドハタ著、荒このみ訳『七つの月』講談社 1991年
- 4 新村出編『広辞苑』第四版 岩波書店 1991年
- 5 大野晋 佐竹昭広 前田金五郎編『岩波古語辞典』岩波書店 1974年
- 6 鎌田正 米山寅次郎著『大漢語林』大修館書店 1992年  
諸橋徹次著『大漢和辞典』大修館書店 1971年

「浮世」の源とされる中国語の辞書では、「浮生」がエントリーされている。①はかない人生 ②[転] 人生」となっている。

愛知大学中日大辞典編集処編『中日大辞典』増訂第二版 大修館書店 1988年

また、『辞海』では、①謂世事無定、生命短促、是对人生的消極看法（世の中

は定めがない、命は短い 是は消極的な人生観である) とし、李白の詩から「春夜宴桃李園序」 光陰者百代過客也而浮生若夢為歡幾何 (光陰は百代の過客なり、浮生は夢の如し、歡を為す、いくばくぞ) を引用している。

辞海編集委員会編『辞海』 縮印本 上海辞書出版社 1979年 上海辞書出版社

- 7 *Oxford English Dictionary*, Second Edition on CD-ROM, (Oxford, Oxford University Press)
- 8 *Webster's Third New International Dictionary* (Springfield, Meriam-Webster Inc., Publishers, 1986)
- 9 *Random House Encyclopedia* (New Revised Third Edition (New York, Random House, 1990)
- 10 水原一校注 『新潮社日本古典集成 平家物語』 上 新潮社 1979年 25ページ
- 11 三木紀人校注 『新潮日本古典集成 方丈記 発心集』 新潮社 1981年 15ページ
- 12 富山奏校注 『新潮日本古典集成 芭蕉文集』 新潮社 1980年
- 13 唐木順造著 『日本人の心の歴史』 下 筑摩学芸文庫 筑摩書房 1993年 50ページ
- 14 Kazuo Ishiguro, *The Remains of the Day* (Lndon/ Boston, faber and faber, 1989)
- 15 大野和基 インタビュー 『文学界』 2006年 8 月号 <http://www.globe-walkers.com/ohno/interview/kazuoishiguro.html>